

# 「～どころか(どころではない)」等の 意味用法について

服 部 匡

## 1

本稿では、「PどころかQ」および「Pどころではない」を扱う。「PどころかQ」<sup>1)</sup>は「Pである」と断定することの妥当性の打ち消し<sup>2)</sup>を踏まえてそれに代わる実情としてQを提示するものであり、Qの提示を行わずに打ち消して言い切るのが「Pどころではない」である。ただし単にPと断定することの妥当性を打ち消してQを提示すると述べたのでは「どころか(どころかではない)」の一面を捉えたことにしかならない。以下、「どころか(どころかではない)」の意味機能、使用条件を探ることにする。類義の二三の表現にも言及する。

なお、「どころか」と「どころではない」は基本的な特徴を共有するものの、「どころではない」には、「どころか」には見られない用法の偏りが存在する。この点は5で述べる。両者に共通の性質に言及する場合には原則として「どころか」を例とする。

「どころか(どころかではない)」に関する過去の研究は少ない<sup>3)</sup>。筆者の知り得た限りでは、用法を整理して三つの類型があるとした初(1980)が最もまとまったものであるが、そこには「どころか」の現れに共通する本質的な意味特性を明らかにするという視点が欠けており、逆に唯一の記述で三種類の用例を説明しようとするのは誤った方向であるとの考えを示唆する語句さえ見られる。初氏の分析の概要とその問題点は2.3で詳しく述べる。

なお日付のみを記した用例は朝日新聞の記事である。

## 2

## 2.1

本稿では、まず、筆者が「どころか」の意味機能の最も基本的な特性であると考えられるものを大まかな形で提示した上で、詳しい分析を進めることとする。まず具体例を一つ観察しよう。

(1) 彼女はピアノが上手ですか？

上の(1)の間に続く答えとしてどのような発話が可能であろうか。(2), (4)は可能だが(3)は何か不自然に感じられる。一見すると、これは奇妙なことのようと思われるかもしれない。なぜなら、上手さに関して、「プロ顔負けだ>上手だ>下手だ>とても聞いていられないぐらいだ」という序列付けがなされると仮に考えるならば(そうした見方の当否はともかく)、両端の表現が「上手どころか」に続きうるのに、より「上手」に近い「下手」が続くと不自然になるからである。

(2) 上手どころか、プロ顔負けだ。

(3) ?上手どころか、下手だ。

(4) 上手どころか、とても聞いていられない(ほど下手だ)。

素朴な言い方をすれば、「上手どころか」に続く表現として、「下手だ」は「あたりまえすぎる」ように感じられる。つまり、「下手だ」というのは「上手だ」を打ち消した時最も容易に想定される事柄だからである<sup>9)</sup>。「上手どころか」は、「上手か否か」という問題意識を背景として成立するが、これは最も普通には「上手か下手か」ということとみなされる。一般的に言って「PどころかQ」でQは、Pの否定として当然のように想定される事柄であってはならない。

次の例も同じ様に説明される。良い成績を期待するような状況で「優を取った」を否定した時最も普通には「良か可を取った」が想定される<sup>9)</sup>。

(5) —(期待シタ通り)成績は優だったか？

—優どころか [秀だった/?良だった/(?)可だった/不合格だった]

Pの否定として普通に想定される事柄をPという記号で表すこととしよう。例えば前の例では「上手」がPなら、「下手だ」がPである。「どころか」が使用されるのは、「P:P」という対から外れた位置にQがある場合であるが、これには二種類の場合

がある。第一は、Pからみると、Pよりもなお遠い位置にQがある場合である。(2)はこの例に当たる。これを記号を用いて $Q > P : P$ と表そう。第二は、Pから見た時Pよりもなお離れた位置にQがある場合である。(4)はこの例である。これを $P : P < Q$ と表すことにしよう。いずれにしても、「PかPか」という対を心理的に背景にした時意外と感じられるような位置にQがあることが「どころか」のすべての現れに共通する本質的な特性である。

なお、 $>$ 、 $<$ という記号を用いるが、これは数学的な意味での大小関係を意味するものではない。「上手」と「下手」とは、「上手さ」に着目すれば前者が高程度であり、「下手さ」に着目すれば後者が高程度である。「一銭も金がない」は、金がある度合に関してなら最低程度、金がない度合に関してなら最高程度と考えられる。 $>$ 、 $<$ という記号は、序列付け可能なことを表すのであって、どちらが大（高程度）かという観点を含んではいない点に注意されたい（以下高程度、低程度という語を用いる場合は説明の便宜上片方の視点を仮に取るのに過ぎない）。

次の例が不自然な理由はもはや明らかであろう。「出席」を否定したなら「欠席」が、「男」を打ち消したなら「女」がまさに想定されるからである<sup>9)</sup>。

(6) 一彼女は出席ですか？

?出席どころか欠席だ。

(7) 一あれは男ですか？

?男どころか女だ。

次の(8)を考えよう。ここで、「楽器に触ったことすらない」ということが「上手下手以前」で、「上手」からの隔たりが「下手」よりももっと大きいとみなされるならば、(8)は可能である。この場合には「上手—下手—楽器に触ったことすらない」という序列付けがなされていると考えられる。一方、「楽器に触ったことすらない」ならば、そもそも上手か下手かという問自体が成立せず「問題外」であるという見方をするならば、(9)のようにも言える。

(8) 上手どころか、楽器に触ったことすらない。

(9) 上手も何も、楽器に触ったことすらない。

もっとも、「Pも何もQ」と言える場合に常に「PどころかQ」と言えるわけではない。(10)は、「～も何も」は用いるが「～どころか」は不自然になる例である。

ここでは、「存在しない」ということは、「5歳—若い—1年寄り—100歳」といった序列上に配置されないからである。

(10) —フランスの王様は若い人ですか？

— {若いも何も・?若いどころか} フランスには王などいない。

なお、以上の例では、説明上、間に答える文の形で「どころか」の文を提示したが、実際には必ずしも間に答える形でなくてもPという事柄が先行文脈で発話されるなどして注目されていれば「どころか」が用いられる。

Pとは何かについて付言する。「どころか」に先行する部分が「美しい」のような形容詞述語や動詞述語であるなら、その述語そのもの、またはそれを中心とする述語句がPと考えられる（ただし、ナ形容詞では「上手などころか／上手どころか」の二形あり）。一方、「どころか」に先行する部分が名詞（句）や副詞その他の場合には、ダを付加した述語句が想定される。これがそのままPとして考えられる場合(11)もあるが、むしろ、文脈からPを復元すべき場合もある（(12)以下<sup>7)</sup>。後者の場合にも、「どころか」に先行する部分として言語化される部分が、序列化のキーとなるのは言うまでもない。

以下、補う部分を [ ] で示し、PとQに当たる部分を下線で示すことにする。

(11) 社長 [ダ] どころか 平社員だ。

(12) [略] 今は取り残されて半身 [付随ダ] どころか 全身付随という格好ではあるが、とも角こちらの手中にはある。(国研)

(13) ゆっくり [投ゲル] どころか 目にも止まらぬ速さで投げた。

(14) 海外投資の収入 [ガ入ル] どころか, 海外からの借金の利子を支払う義務を負った みじめな国になってしまったのです。(国研)

(15) そこで、一同鴨を見に裏庭に出かけるが、鴨 [ガイル] どころか, 雀一匹いない。(国研)

要するに、「どころか」は、意味的には述語句相当の事柄同志を接続する働きをするといえよう<sup>8)</sup>。

## 2.2

更に他の例から、序列ということを考える。まず数量を含む場合を考えよう。(16)では、「Q(15杯飲む) > P(10杯飲む) : P(10杯飲まない)」の関係が、(17)では「P

(10杯飲む) :  $P$  (10杯飲まない)  $< Q$  (3杯も飲まない)」の関係が成り立つ。「10杯飲まない」より「三杯も飲まない」の方が飲まない度合に関して高度とみなされるからである<sup>9)</sup>。

(16) (彼は10杯は飲むと言っていたが)

10杯 [飲む] どころか15杯も飲んだ。(  $Q > P : P$  )

(17) (彼は10杯は飲むと言っていたが)

10杯 [飲む] どころか3杯も飲まなかった。(  $P : P < Q$  )

次の五例は、 $P : P < Q$ の序列関係が成り立つ場合である。例えば(18)では、「処罰される：処罰されない $<$ （処罰されないに留まらず）重用される」という序列関係が成り立つ。(19)では、「買い物ができる：買い物ができない $<$ 食事のままならない」という序列関係が成り立つ。

(18) 11カ月に及ぶ取り調べは、万次郎の英語、航海・造船術、米国知識の正確さ、深さをきわだたせ、処罰どころか、土佐藩、幕府に重用されることになる。

(91.1.22)

(19) ただ、船員たちの悩みは日本の物価高。「みんな買い物どころか、食事のままならない。(91.10.30)

(20) 翳（かげ）りない明るさは、この建築が、フェイクであるのを、隠すどころか誇りにしている心情の正直な告白そのものだ。(91.1.14)

(21) 時短どころか深夜帰る人々 (91.11.19)

次の五例は、 $Q > P : P$ の序列関係が成り立つ場合である。例えば(22)では、「総裁になる $>$ 閣僚になる：閣僚にならない」の序列関係が成り立つ。(23)では、「（解決していないに留まらず）悪化している $>$ 解決していない：解決した」の序列関係が成り立つ。

(22) リクルート議員が閣僚どころか総裁になったんだから、リクルート議員へのしぼりは解除されたんだな。(91.9.30)

(23) 「100万人が飢えて死んだと言われた80年代半ばほど今は騒がれてないが、スーダンなども含めた『アフリカの角』の飢餓の状況は決して解決していないどころか、確実に悪化している。(91.11.5)

(24) 産業界やエコノミストなどから「景気は減速どころか、下降局面に入ってい

る」との声が強いことを意識したとみられ、[略] (91.11.22)

- (25) 暴力団の全資産を考えれば、「氷山の一角」どころか「一片」が明るみに出たにすぎない。(91.11.22)

より、状況や文脈に依存した例として次のようなものがある。

- (26) 太郎どころか次郎が来た。

上記(26)のように言える状況の一例として、「(好意を持っている) 太郎 [ガ来ル] どころか (最も嫌いな) 次郎が来た」というように、「太郎」と「次郎」が好悪という基準で序列付けられており、「太郎ではないにしても次郎ではあるまい (なくあってほしい)」といった意識がある状況、あるいは、太郎は通常出て来ない大物であり、次郎はより一層出て来そうにない大物であるといった状況があげられる。

### 2.3

前述した初氏の説は次の三つの類型を認めるものである。

(一)話し手が、共存しえない、相反する前件と後件について、前件を否定し、後件を強調する、(二)話し手が程度の異なる前件と後件について、前件に対する限定 (潜在的バカリ或はダケ) を否定し、より高度の後件を強調する、(三)話し手が「～どころかない」の形で高程度の前件を否定し、極端低程度の後件 (否定表現) を強調する。

この説の問題点を述べる。第一に、初氏の三類型の分類自体が混乱している。初氏は(27)は類型(三) (従って後件は否定形式) であるとするのであるが、後件が肯定形式である(28)も、「(勤勉さの度合に関して) 高程度の前件を否定し、極端低程度の後件を強調する」点では同じである。(29)と(30)は氏の(一)と(三)のいずれの類型になるのか筆者には分からないが、いずれにしても、後件の形式が否定か肯定かということと、後件か前件に対して「極端低程度」であるということとは直接関係がない。(27)-(30)はいずれも  $P : P$  (部屋を掃除しない)  $< Q$  の類型に当たる。つまり怠け者の度合に関して  $P$  より  $Q$  が高度である。

- (27) 山田さんは部屋を掃除するどころか、顔も洗わないくらいの怠け者だ。

- (28) 山田さんは部屋を掃除するどころか、爪さえ人に切ってもらうくらいの怠け者だ。

- (29) 山田さんは部屋を掃除するどころか、半年もゴミを放っておくくらいの怠け者だ。

(30) 山田さんは部屋を掃除するどころか、半年もゴミを出さないくらいの怠け者だ。

第二に、初氏が前後件は「共存しえない、相反することがら」であるとする類型(一)とて実は序列性と無縁ではない。この種の説明が不備なことは、「前件が後件と反対になる、共存しえない事柄」である(6)、(7)を考えれば明らかである。独身ということと既婚ということは共存しえず相反するが「彼は独身どころか結婚している」はおかしい。(31)のように言えるのは、「独身である：結婚している<（結婚しているに留まらず）結婚して子供が3人ある」という序列関係が成り立つからに他ならない。結局初氏の3類型への分類は必要がなく、すべて $P : P < Q$ と $Q > P : P$ のいずれかの場合に当てはまるといえる。

(31) 彼は独身どころか、結婚して子供が三人あります。(初氏の例)

第三には、張(1993)も指摘するように、初氏の三類型のいずれにも収まらぬ例があることである。初氏は類型(二)は「前件そのものは後件と同類の、共存しうる、程度の低いことがら」であり、「ドコロカを『ばかりでない』で置き換えられる」と特徴づける。

(32) 90点どころか100点を取った。

ところが、上の例で前件「90点 [を取る]」は「100点を取る」と同類で(良い点を取る度合に関して)より程度の低い事柄であるが「共存しうる」という類型(二)の特徴が当てはまらず「ばかりでない」への置き換えもできない。また後件と「反対になる」ことでもないから類型(一)にも当たらない。

第四に、「後件を強調する」といった説明は、「強調」という概念が曖昧にすぎたため十分な説明力を持つとは言えない。

## 2.4

結局、「PどころかQ」は、「Pである」と断定することの妥当性を打ち消したうえで、「PかP」かという対から外れた位置にあるQを導くものであるといえる。ここでPからPに向かう方向を正としてPよりQが高度な事柄とみなされるか、または、PからPに向かう方向を正としてPよりQが高度の事柄とみなされるかのいずれかでなければならない。「Pどころではない」はこうしたQを暗示する。

## 3

ある種の反義対と「どころか」との関係について特に考える。

## 3.1

「強い—弱い, 大きい—小さい, 難しい—易しい, 上手だ—下手だ, おいしい—まずい」といった程度性を有する表現の対を考えよう。各対を「A—B」と表す。

こうした対では、「AどころかB」という言い方は、普通の状況では不自然である。例えば、おいしいくない度合いが大きいこととまずい度合いが大きい事は同じであるから「おいしい」を打ち消したなら、まず「まずい」と想定されるためである。

Aよりも高度の表現Cを用いて「AどころかC」ということ、Bよりも低度の表現C'を用いて「AどころかC'」ということとはできる。(2), (4)の例がこれらに当たる。

次の例は、一見、以上の説明の反例であるように思われるかもしれない。

(33) —そのシャツ, 大きいですか?

—大きいどころか小さいくらいだ。

しかしながら、(33)の「大きい」は実際には本人の体格を基準として「大きすぎる」ことを表し、ここでは「大きい」の打ち消しから第一に想定されるのは「丁度いい」であり、「大きい」からの距離のより離れた「小さい(小さすぎる)」は後件として適切なのである。一般に、P(上の「大きい」とP'(上の「小さい」)が程度性を有する対概念であっても、Pであるか、基準となる程度(上の「丁度いい」とか「普通」とか)かの対立が問題とされている場面では「PどころかP'」と言える。こうした場合は3.2のタイプに準じた見方がなされることになる。次のような例も同様に考えられる。

(34) —この筍, まだ早いですか?

—早いどころか遅いくらいだ。

## 3.2

「寒い—暑い」, 「悲しい—うれしい」, 「損する—得する」, 「余る—不足する」といった対を考えよう。ここでは、「寒くない」度合いが大きいことと「暑い」度合いが小さいことは同じではない。基準となる「普通の温度, 丁度良い温度」の領域よりも低

温なのが「寒い」、逆に高温なのが「暑い」である。「寒い」を打ち消した時普通に想定されるのは「丁度良い」、あるいは「暖かい」であって「暑い」ではない。だから(35)のように言える ( $P : P < Q$ )。

(35) —メキシコは暑かったですか？

—暑いどころか寒かったですよ。

なお「暑い」は「涼しい」と「寒い」は「暖かい」と、直接には対をなすと考えることもでき、その場合には3.1のタイプに当たる。

#### 4

次に、「どころか」と類意の表現をいくつか検討する。

「(体言)はおろか～」という言い方は殆どの場合、「～どころか～」に置き換えられる。「AはおろかB」では、Bの部分は典型的に「xも(だって、さえ、すら、まで)Y」のような形<sup>10)</sup>をとり、Yは否定形式か、形式的に否定でなくとも何事かの不実現を表す述語である場合(39)が多い。その場合、Yを成立せしめる可能性がAよりも低いとみなされるxについてなおYが成立することを表す。例えば、(36)は、「パソコン」が「使えない」だけでなく、(使えない対象としてより考えにくい)「ワープロ」すら「使えない」ことを表す。この文の「はおろか」を「どころか」で置き換えれば、Pは「パソコン [を使える]」、Qは「ワープロも使えない」であり、 $P : P$  (パソコンを使えない)  $< Q$ となる。以下の例も同様に考えられる。

(36) 僕はパソコンはおろか、ワープロも使えません。(88.6.26)

(37) 「たかがおもちゃ」とも言えない危険なものは販売はおろか、製作もしないでほしいと強く思います。(88.2.6)

(38) 無差別の爆破などがひんぱんに、ち密に行われては、外出はおろか、自宅にも安心しておられない。(88.3.26)

(39) 韓国はこれまで、五輪参加締め切りの17日以後も、北朝鮮の五輪参加を促してゆく姿勢だったが、今回の「制裁」要求で、北朝鮮が求める「南北共催」協議はおろか、南北対話そのものも当面、壁に突き当たったといえそうだ。

(88.1.17)

もっとも、上のタイプとは異なる次のような例もある。「どころか」で置き換える

とQ（将来の配偶者まで取り込む）>P（核家族全員を取り込む）：Pとなる。

(40) 核家族全員はおろか、自分たち姉弟の将来の配偶者までバッチリ取り込み、しかもハードとソフトの役割分担（89.7.7）

(41) 暁に手をつき『三顧はおろか四顧、五顧の礼でお迎えしたい。どうかわが校を救ってください』と。（88.7.30）

ここでも、「核家族全員(A)を取り込む(Y)」より「将来の配偶者(x)を取り込む(Y)」がより成立しにくい事柄とみなされる。つまり二つのタイプのいずれでも、「AおろかxY」の形で、xはAよりもYを成り立たしめ難い事柄であるという点は同じである。より正確にいえば、「xについてYが成り立つような状況なら、AについてもYが成り立つ」という含意関係が背後に想定される<sup>11)</sup>。「赤字どころか黒字を出した」とは言えても「赤字はおろか黒字を出した」とは普通言えないのは、「黒字を出す状況なら、当然赤字を出す」という関係が成り立たないからである。

次に「ばかりか（ばかりではない）」という言い方を考えよう。「どころか」のQ>P：Pのタイプでは、「ばかりか」に置き換えられることがある。

「AばかりかB」（Aばかりではない。B）は、「Aのみが成立する」場合に対し「AとBとが共に成立する」場合がより高度の事柄であるとみなされる時用いられ、AだけでなくBも成立であることを表す。従って、(42)のようにP「英語 [を知っている]」とQ「フランス語もドイツ語も知っている」が共に成立であるとみなされる場合には「ばかりか」で置き換えられるが、(43)のようにP「優 [をとる]」とQ「秀をとる」が同時成立でない場合には、たとえQ>Pであっても、置き換えられない<sup>12)</sup>。

(42) 田中さんは英語どころか、フランス語もドイツ語も知っている。

(43) 優どころか、秀をとった。

また、逆に、「ばかりか」の文において、AとBが同時成立であり、Aのみの成立よりAとBの成立の方が高度であっても、AとBの間に序列上の関係がないならば「どころか」で置き換えられない。

(44) 停電したばかりか、ガスも止まった。

最後に、同じくPと述べることの妥当性を打ち消す「Pなどというものではない。(Q。)」という言い方は、Q>P：Pの場合の「どころか」に近い用法を（他の用法

と共に) 持つ。

- (45) 上手などというものではない。プロ顔負けだ。

## 5

「Pどころではない」には「Pどころか」にはない用例の偏りが見られる。例えば、「旅行どころではない」は普通、「旅行に行くような余裕はないし、単に旅行に行けない程度というよりも、もっと余裕のない状態にある」場面で用いられる。このように、「余裕(余地)のある度合」に関して「P(例:旅行に行ける):P(例:旅行に行けない)<Q(例:家からも出られない)」の序列付けができるようなQを暗示する用例が極めて多い。

- (46) 駐車場までつくっている、店はとても得をするところではないだろう。

(88.12.11)

- (47) 同社は「2日間は戦争を報じるテレビにくぎづけになって、買い物どころではない方が多かった」とみている。(91.1.28)

- (48) 昨年、全国の高校長が集まった席で、九州の代表が、受験補習に追われ、「ゆとり」どころではない現状を訴えていた。(89.2.11)

- (49) いまでは、学識経験者による研究会が細々と活動しているだけ。竹下内閣も、いまはそれどころではないのかもしれないが、民主主義の基本にかかわる問題だけに、地味なことだからといってほって置くべきではない。(88.1.24)

もっとも、上の類型とは異なる次のような例も見られる。

- (50) 「もし星々のきらめきに音を与へたなら、ベートーヴェンの大交響楽どころではない。(Q>P:P)(88.1.13)

- (51) 確かに都銀は「痛めつけられた」どころではない。9月中旬決算は過去最高益になった。(P:P<Q)(88.12.2)

## 6

他に、出現頻度は低いが、「どころの騒ぎではない」という形の例が見られる。なぜここに「騒ぎ」という語が用いられるのか興味深いが、共時時的観点からその用法を記述しようとする時、「どころではない」との相違を明確な条件として示すのは難

しい。ただ、およその傾向として、次のようには言える。「Pどころの騒ぎではない」は「Qだ」を暗示するが、ここでQは、いわば、「Pどころではない騒ぎ」であり「騒ぎ」という語にふさわしいような、多面的かつ派手に動く感じを伴った事柄である場合が多い。

- (52) 賃金の不利益回復を求めて都労委に初めて救済申し立てをしたのは49年。ところが、50年4月に組合の幹部ら13人が解雇され、賃金の不平等どころの騒ぎでなくなってしまった。(88.4.12)
- (53) 新宿区の四谷舟町は昔、舟板用の木材を産出したのでこの名があるのだそうだ。無論いまは都心の住宅密集地。広い外苑東通りが町を斜めに分断して、舟板どころの騒ぎではない。(89.1.14)
- (54) 壁紙を新しくして礼を言われるかと思ったら、全く当然のような顔でジュウタンや畳、ふすまの張り替えまで要求してくる。敷金が戻ってくるどころの騒ぎじゃない。さらに20万円くらいかかると言う。(89.2.5)
- (55) 「若いころは歌どころの騒ぎではなかった。幸せな時代になった今、世界平和が続くよう法王の前で思いっきり歌いたい」と、期待は募るばかりだ。(90.11.29)

さらに他に、「どころの話ではない」の形の例がある。これも傾向を記述するとどまるが、「Pどころの話ではない」では、Pは肯定的な評価を受ける事柄である場合が多いようである。

- (56) いくつかの町村では、全員が失業を余儀なくされる。創生どころの話ではない。首相の創生論がどんな内容になるのか、一面期待しながら、注目して見ますよ。(88.1.17)
- (57) いくら経費がかかるといっても、これでは薬九層倍どころの話ではない。  
[略] 円高と二重のおいしいところを日本の商売人がガッポガッポと懐に入れているようすが目に浮かぶ。(88.2.26)
- (58) 人を公正に選抜するのは、それほどむずかしい。だが、試験そのものがゆがめられていては、公正どころの話ではない。(88.3.3)
- (59) 支局の入居するビルにあるソ連総領事館の広報部が、店じまいすることになった。本国の激変で外務省の予算がバッサリ削られ、広報どころの話ではな

くなったためだ。(91.12.18)

他に、まれではあるが、肯否定の形を並べて「～どころの話……」とする例が見られた。

- (60) 博士の未来図が現実のものになれば、アメリカの穀物輸入量をふやすふやさないどころの話ではない。(81.10.16)

## 7

本稿では「どころか（どころではない）」の意味用法を論じた。この表現の用法は「Pか否か」という対が話者の心理に存在すること、および、一種の序列関係が背景に存在することを仮定して初めて十全に説明することができる。またこの表現は、反義対<sup>13)</sup>の構造に関しても示唆を与える。序列とは何かということなど、なお明らかにすべきことは多いが否定の意味論において従来注目されなかった側面を多少なりとも指摘しえたと考える。

## 謝 辞

本稿の草稿段階で、丹羽哲也、藤田保幸の両氏に有益な御意見を頂いた。お礼申し上げます。

## 注

- 1) 下記の例のように、「どころか」はかつては一種の反語（あるいは単なる発問もか）として用いられたらしいが、今日では独立した文を終止することはなく、一種の接続表現としてのみ用いられる。

これはいかなこと、その年になって、辦慶の人形どころか。(「二人袴」 日本古典文学大系 狂言集下)

なお今日の「どころか」は上例のような反語的な「どころか」に起源するものであるとしても、典型的な反語表現とは性質が異なる（「そんなことができるか」のような「～か」の形の反語では「言うまでもなく～ではない」という含みが生じるが「どころか」にはこのような含みはない）。この点で、服部（1992）において「どころか」や「ばかりか」を「一種の反語」であるとしたのは不正確であったゆえ訂正する。

- 2) 仮に、「上手どころではない。プロ顔負けだ」という言い方が行われるとする。ここで、論理的には「プロ顔負け」ということも「上手」の範囲に含まれるはずであるから、上手だということを否定してプロ顔負けだと述べるというのは矛盾していると言いうるかもしれない。しかしながら、日常言語での打ち消しは必ずしも論理的な否定と同じではない。「上手だ」と断定するのは（弱過ぎて）適切ではない、とした上で「プロ顔負けだ」と述べることは日常言語の発想として別におかしなことではない。ここでは打ち消しという用語をこのような広い意味で用いている。
- 3) 国立国語研究所（1951）に「かりにある事物を挙げて、大仰にそれを否定し、他の事態の叙述を持ち出す拠り所とする」とある他、（一々の引用は避けるが）辞書類等に見られる説明はいずれも筆者から見れば満足のいくものではない。
- 4) 「上手だ」を打ち消した時残る領域（鈴木（1962）のいう「打ち消して残るところ」）は、「上手でも下手でもない」、「プロ顔負けだ」、「とても聞いていられないほど下手だ」なども含みうるが、特に反義語である「下手だ」との対が心理的に前景化されやすい。
- 5) もっとも、「当然秀が取れる。まさか優ということはあるまい」といった文脈では、「（実際ニハ）優どころか良かった」と言える。この場合には「優を取るか否か」という対が背後にあり、「優を取る」の否定としては、「（予想通り）秀を取る」が想定される。このように、「PどころかQ」のP、Qとしてどのような表現の組が入りうるかは、状況に応じた話者の意識のあり方に依存するのであって、単に「秀—優—良—可—不合格」といった事柄相互の序列関係のみから決定されるものではない。
- 6) 次のようには言えるかもしれないが、この場合はP（男ではない）<Q（単に男でないだけでなく）正真正銘の女だ）と序列付けられる。  
あれは男どころか正真正銘の女だ。
- 7) (14)は、文脈次第では「海外投資の収入 [ガ入ラナイ] どころか〜」と考えることもできる。その場合にはQ（借金の義務を負う）>P（投資の収入が入らない）：P（投資の収入が入る）と考えられる。  
次の例ならば、Pは「半身が動かない」と考えるのが自然であろう（Q>P：P（「半身が動かない」の否定））。どちらとも決めにくい場合もありうる。  
(61) 半身どころか全身が動かない。
- 8) 指示詞を用いて「それどころか」の形になることも少なくない。  
(62) 「台所は女の城」との言葉は、もう通用しないのか。それどころか台所という空間さえ、 unnecessaryになる時代がやってくるのだろうか。
- 9) こうした「少量性強調」のモについては、前田（1991）が詳しい。もっとも、

P : P < Q のタイプで、数量をキーとしての序列化がなされる場合に常にそのような少量性強調の要素が必要なわけではない。

- 10) 次の例のように極小値（ブラウス一枚）の表現の場合もある。  
金あまり日本だと聞かされたけれど、旅行はおろか、新しいブラウス1枚買わず、つましく暮らしている私たちに、30万円は大金。(89.3.23)
- 11) 厳密にはこの規定は厳しすぎるのであるが、典型的にはこれが成り立つと言ってよい。なお、事態間の含意関係が「意外のモ」の使用条件を規定することについて、定延 (1995:240) が指摘している。
- 12) なお「どころか」の P : P < Q の類型では多くの場合、「< P の否定 > ばかりか Q」と言える。例えば、「外国に行くどころか隣の町にも行けない」では「外国に行けないばかりか隣の町にも行けない」と言える。
- 13) 程度性を有する反義対については服部 (1993,1994abc) で若干の議論を行ったが、さらに近刊の拙稿で一般的に論じる予定である。

#### 参考文献

- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞』
- 定延利行 (1995) 「心的プロセスから見た取り立て詞モ・デモ」益岡隆志他編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 初 玉麟 (1980) 「どころか—その接続と意味の説明・分類をめぐって」『言語』10-10
- 鈴木一彦 (1962) 「打ち消して残るところ」『国語学』50
- 張 素芳 (1993) 「『どころか』の用法と機能—『ばかりか』との比較を中心に」『文芸研究』132
- 服部 匡 (1992) 「現代語における『～か』のある種の用法について」『徳島大学国語国文学』5
- 服部 匡 (1993) 「副詞『あまり』について—弱否定および過度を表す用法の分析」『同志社女子大学学術研究年報』44—IV
- 服部 匡 (1994a) 「アマリ～ナイとサホド (ソレホド) ～ナイ」『同志社女子大学日本語日本文学』6
- 服部 匡 (1994b) 「副詞『なかなか』の意味用法の分析」『言語学研究』13
- 服部 匡 (1994c) 「『大して (～ない)』, 『大した』について」『同志社女子大学学術研究年報』45—IV
- 服部 匡 (近刊) 「程度性を有する反義対の一分類」
- 前田広幸 (1991) 「数量の少量性を強調する『モ』について—尺度の無標方向性および否定の働き」『女子大文学』42

村木新次郎（1987）「対義語の輪郭と条件」『日本語学』6-6

森田良行，松木正恵（1990）『日本語表現類型』アルク

### 付 記

本研究は平成7年度文部省科学研究費補助金（一般研究（C））の助成による研究成果の一部である。

服部（1994a）の正誤表

誤

正

p. 1 『使い方のわかる日本語類義語辞典』

『使い方の分かる類語例解辞典』

（参考文献の追加）

村木新次郎（1987）「対義語の輪郭と条件」『日本語学』6-6

（本学・助教授）